



## 第5期 中間事業報告書

2006年1月1日～2006年6月30日

### CONTENTS

プロフィール .....	1
デジタルの眼＝センサで、 ものづくりの課題を解決しています。	
株主の皆様へ .....	3
国内市場の開拓、アプリケーション機器の販売増により 当中間期の売上高は前年同期比9%増となりました。	
■株主の皆様からの質問にお答えします .....	4
特集 .....	6
世界トップレベルの光学センサメーカー SICK AGとの戦略的アライアンス	
TOPICS .....	7
財務ハイライト .....	8
要約個別中間財務諸表 .....	9
株式の状況 .....	10

# デジタルの眼=センサで、ものづくりの課題を解決しています。

高い付加価値が要求されるものづくりの現場では、生産性の向上や品質要求の高度化の中で、品質管理がますます重要になってきています。精度の高い品質管理を行うにあたっては、製品の微妙な変化や差異を検知するセンサが多種多様に用いられています。当社は、品質管理と生産性向上を提案するパートナーとして、各種産業用センサを提供する独創的な開発型企业です。

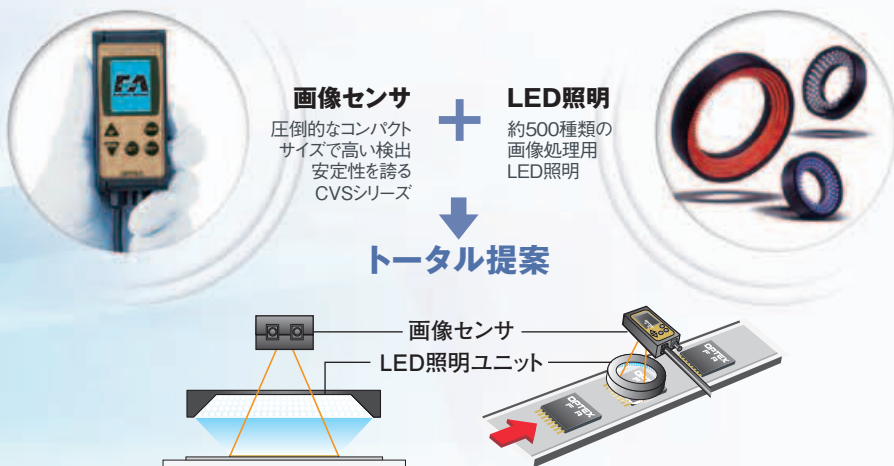


## お客様に「生産・品質管理」のソリューションを提供しています

自動化されたラインで製品を生産するFA（ファクトリー・オートメーション）の世界では、短時間で多量の検査が必要とされています。このFAの現場で、欠かせないキーパーツとなっているのが、物体に接触することなく、すばやく高精度に物体を検出できる赤外線を利用したセンサです。

製品の小型化・微細化、品質ニーズの高度化、生産ラインのスピードアップ、検査項目の複雑化など、産業用センサが必要とされる用途はますます広がっています。当社は需要拡大を続ける産業用センサ分野で、独自技術を駆使して、お客様のニーズに応じた最適なソリューションを提供しています。

## 例えば…画像センサとLED照明を組み合わせ、最適な画像処理システムを提案



ものづくりに関わるさまざまな企業では、製品に付着する微細な異物や傷を排除するために高度な品質検査が必要となっています。こうした検査では、画像センサが活躍していますが、検査精度を高めるためにLED（発光ダイオード）照明が重要な役割を果たしています。照明によって検査対象の傷・異物・へこみなどを強調することで、検査の安定化・精度の向上が図れるからです。

これまでセンサと照明それぞれを単独で提案するメーカーは数多くありましたが、当社は2006年1月にLED照明事業を開始し、双方を組み合わせたトータルな画像処理システムを提案することが可能になりました。

## “これまでになかった製品”で企業のものづくりを支援していきます

当社は、設備投資が必要となる製造部門を自社に持たず、生産をすべてアウトソーシングし、研究開発・製品開発およびマーケティングに特化するビジネスモデル（＝ファブレス生産）による事業を行っています。

ものづくりの現場では品質管理ニーズがますます高度化し、

当社が提供する産業用センサには、高精度な機能と、導入を促進する価格力の双方が必要とされています。

当社はビジネスモデルの優位性と技術力を活かし、「CVSシリーズ」や高度な機能を持たせた各種アプリケーション機器など、“これまでになかった製品”の開発により、世界のものづくりをサポートしていきます。



### 営業担当者の声

#### 画像センサとLED照明 セット提案ができる強み

オールインワン型画像センサ「CVS」は、コンパクトで、操作が容易でありながら、高い検出性を実現した製品としてお客様から高い評価をいただいておりますが、営業活動ではLED照明との組み合わせによる提案も行っています。

たとえば、対象物の後方にLED照明を設置し、シルエットによって検査したり、照射方法を変えて、誤判定の要因となるノイズの影響を軽減させたり、逆に検査対象項目を強調させるなどの提案です。

LED照明は全ての検査用途で使用が可能ですので、時には照明のみを提案する場合もあります。センサメーカーである当社は画像処理に精通しているため、LED照明をどのように使えば検査可能かをイメージして提案でき、お客様に評価いただいております。

こうしたLED照明の提案活動は、どのような検査内容や要求精度が必要かといった情報収集にもつながり、こうした情報を次期の製品開発に活かしていきます。



# 国内市場の開拓、アプリケーション機器の販売増により 当中間期の売上高は前年同期比9%増となりました。



オプテックス・エフエー株式会社 代表取締役社長  
小國 勇

株主の皆様には、格別のご支援、ご高配を賜り厚く御礼申し上げます。上場後の初決算を増収増益で迎えた当社は、当中間期におきましても、前年同期比で増収増益を果たすことができました。

当中間期の業績は、売上高16億81百万円（前年同期比9.0%増）、経常利益2億82百万円（同17.3%増）、中間純利益1億7百万円（同16.2%）となりました。

増収増益の要因としては、国内市場で汎用機器※1および変位センサ、画像センサなどのアプリケーション機器※2とも売上が伸張したこと、また海外市場でもアプリケーション機器の販売が好調であったことが挙げられます。

当中間期、当社は名古屋営業所を開設し、中部東海地区の自動車業界への営業活動を本格化させました。当社は、国内の自動車・半導体・電気業界への営業力強化を重要な施策に掲げておりますが、その足がかりを構築でき、次期以降に成果が現れてくるものと考えております。

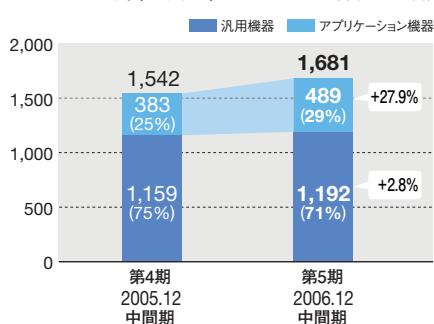
今後も当社は、ファブレス生産による研究開発とマーケティングに特化したビジネスモデルの強みを活かし、市場開拓に積極的に取り組んでいく所存です。

株主の皆様には、当社の事業展開にご期待いただくとともに、温かいご支援を賜りますようお願い申し上げます。

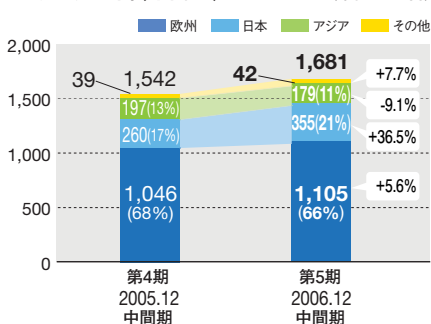
※1 汎用機器：生産ラインを流れる製品の有無、カウントなど、主に生産性向上のための用途に使われる汎用性が高い製品。

※2 アプリケーション機器：色判別、印字の有無などの特定用途向けに開発した、主に品質管理用に使われる当社独自開発製品。

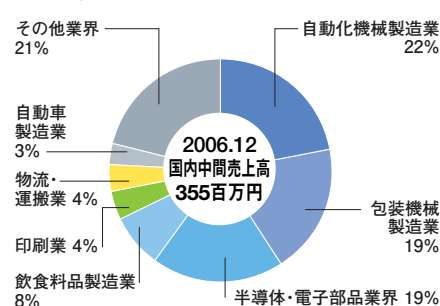
品目別売上高（中間期）（単位：百万円）



地域別売上高（中間期）（単位：百万円）



国内業種別売上割合



## 株主の皆様からのご質問にお答えします

**Q1 国内営業体制の強化について教えてください。**

**A1 世界最大のマーケットである日本市場への浸透を、経営の重要な施策と位置づけています。**

産業用センサ市場で、日本は世界最大のマーケットを形成しています。当社は海外市場の開拓もさることながら、まずこの最大市場への浸透を優先課題に掲げ、制御機器やメカトロニクス分野の専門商社の活用、そして直販ルート of 拡大（拠点増設）という両面から取り組んでいます

当中間期、専門商社とのジョイントが徐々に成果を現し始めたこと、またアプリケーション機器の伸張により、売上高に占める国内比率は、前年同期17%から21%へと高まりました。

国内市場の拡大にあたっては、食品など既存業界での高シェアを持続させつつ、新製品の開発によって、より大きな市場である自動車や電気、半導体などの業界へ展開する戦略をとっています。この拡大に向けた戦略製品が、当社独自開発による世界初のオールインワン画像センサ「CVS（カラービジョンセンサ）シリーズ」です。

新市場開拓は、まず中部・東海地区の自動車業界から本格的な営業活動を行うべく、2006年7月、名古屋営業所を開設し

ました。活動を開始したばかりですが、商談が非常に活発化しており、次期以降に向けた確かな手ごたえを得ております。

国内営業拠点の強化にあたっては、地域ごとの産業構造に照準を当て、地域特徴に応じた新製品の投入と歩調を合わせながら拡大していく計画であり、次の新規営業拠点として、北関東地域への進出を検討しています。

**Q2 世界市場での販売動向と戦略を教えてください。**

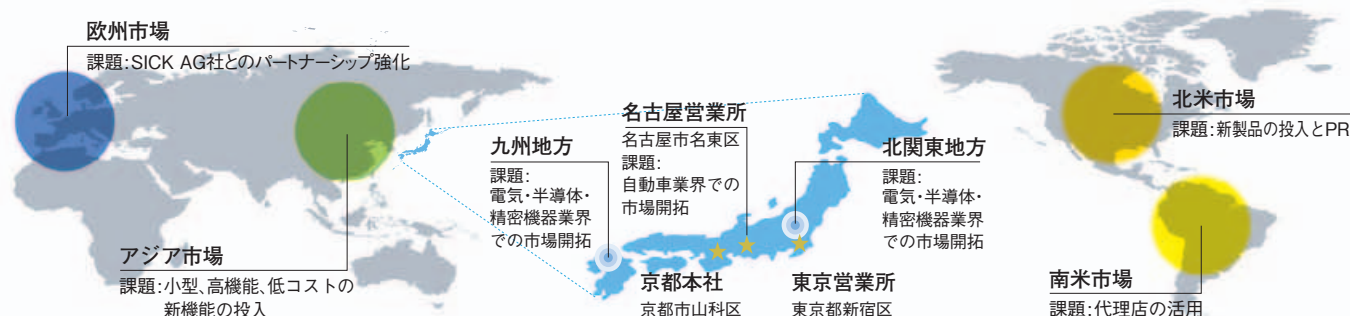
**A2 欧州市場での確固たる販売基盤を軸に、米国・中国市場での拡販を図っていきます。**

当中間期の海外売上高は3%強の伸びとなり、国内売上高の30%以上の伸び率に比べると低い伸び率となりました。これは主に米国市場において、当中間期に投入した新しいアプリケーション機器の販売が足踏みしたことと、アジア市場の代理店において新製品の投入が遅れたことによります。下期は新たに投入する製品を軸に、展示会への出展などを通じ、現地販売代理店\*と一体となって積極的な拡販に取り組んでいく計画です。

当社は海外売上高が約8割を占めておりますが、その要となるのが、SICK AG社（独）向けの汎用機器の販売であり、欧州市場で堅調な推移を見せています。当中間期は、同社向けアプリケー

\* 当社は海外販売において1国1代理店制度を構築しています。

### 全世界でのマーケティング活動と課題



ション機器の販売も伸張し、前年同期を上回る販売量となりました。当社の大きな強みは、同社とのアライアンスによって欧州市場における一定の売上が確保できていることです。両社の関係については、本誌でも特集ページを設けて説明しております（P6参照）。

アジア市場で重要なマーケットである中国では、2008年の北京オリンピックに向け、空港を始め公共施設の建設ラッシュが続き、物流や交通機関で必要とされるセンサ製品の採用競争が激化しています。当社は、より小型、高性能、低コストの新製品を継続的に投入し、優位性を維持していく計画です。

### Q3 新規事業として開始したLED照明事業の進捗状況は？

#### A3 有力メーカーとの提携も視野に入れ、技術領域を広め、事業拡大を図ろうとしています。

2006年1月から開始したLED照明事業は、品質管理・検査用途で需要が高まっている「画像処理センサ」と「照明」を組み合わせた提案をおこなう事業です。画像処理用照明の国内市場は100億～110億円規模と推測される大きな市場でありながら、画像処理センサと照明は、個別に専門メーカーで開発が行われています。これを一体のシステムとして提案・開発することで、当社はシェアを拡大していこうとしています。

当中間期におけるLED照明事業は、当社の既存製品が浸透している食品・化粧品・薬品業界から採用を頂き、自動車や半導体などの業界でも採用が始まりました。当中間期後半から確かな手ごたえを得ており、次年度以降の営業基盤の強化につながるものと認識しております。

LED照明事業では現在、OEM製品の販売を行っておりますが、次年度には、当社独自開発によるLED照明製品を発売する予定です。また、早期に確固とした事業基盤を構築していくために、高度な画像処理関連技術を有する有力メーカーとの提携なども視野に入れております。

### Q4 通期の業績見通しと配当政策について教えてください。

#### A4 売上高35億円の達成と、普通配当2,500円を予定しております。

下期におきましては、新たな拠点を軸とした自動車業界を始めとする新規業界の開拓、LED照明事業における拡販に注力するほか、「CVSシリーズ」を始めアプリケーション機器の新製品開発に取り組んでまいります。また海外市場では、米国経済停滞への懸念があるものの、新製品の投入により北米・アジア市場での拡販を図っていきます。

こうした施策により、通期業績予想につきましては、期初計画通り、売上高35億円、経常利益6億円、当期純利益3億50百万円を見込んでおります。

配当政策に関しましては、株主の皆様に安定した利益還元を行うことは、当社の重要な経営課題であると認識しております。事業拡大、経営基盤確立のための内部留保の充実を勘案しながら、業績に連動した利益還元を実施し、2010年には配当性向30パーセントを目指すことを目標としております。当期末の配当金は、普通配当2,500円を予定しております。

2006年9月

オブテックス・エフエー株式会社 代表取締役社長 小 國 勇



**SICK**

世界トップレベルの光学センサメーカーSICK AG社との戦略的アライアンス

## 約20年にわたる強固なビジネス・パートナーシップ

当社の経営面における強みのひとつは、世界トップレベルの光学センサメーカーSICK AG (ジック エージー) 社との強固なパートナーシップにあります。

SICK AG社は欧州のセンサ市場で35%というトップシェアを有し、産業用センサを始め安全システム、環境監視装置、自動認識装置など産業向けの幅広いセンサ装置を提供しています。当社は、欧州市場で同社が販売する汎用型光電センサを中心とした製品開発とOEM生産を担っています。

両社の関係は、当社の親会社、オプテックス株式会社が、光電センサ事業を開始した1987年にさかのぼります。オプテックスから独立し、パートナーシップを引き継いだ当社は、年々、関係を強化し、中間期におけるSICK AG社向け取引高は、11億5百万円と前年同期の5.6%増となりました。

当社とSICK AG社が締結した基本契約により、図のようにグローバルマーケットにおける独占販売地域と併売地域を定めております。当社は併売地域の中でも、とりわけ北米・アジア市場における営業活動を活発化させています。

## SICK AG社の製品開発を担う合併会社「ジックオプテックス」

SICK AG社向け産業用光電センサの研究開発は、当社とSICK AG社が50%ずつ出資した合併会社「ジックオプテックス株式会社」(本社：京都リサーチパーク)が担っています。

ジックオプテックスは、小型汎用光電センサ分野の開発を担う一方、変位センサ、レーザーセンサ、ファイバーセンサなど高機能アプリケーション機器の開発も推進し、SICK AG社の小型産業用センサの開発部門として高い評価を得ています。

ジックオプテックスの強みは短期間での製品開発と、最先端のセンサ技術が集積される日本市場での技術・製品動向を踏まえた開発ができることにあります。

当社は、SICK AG社との“win-win”の関係を維持・発展させることで、技術的なバックボーンと欧州向け販売網を確保しながら、独自の製品開発にも力をいれ、強固な事業基盤を築いていきます。

## ● SICK AG 社

世界でも最も早期に光電センサの開発製造に着手したメーカーの1社で、世界トップレベルの光学設計力を保有。創業から現在に至るまで、センサ市場のリーディングカンパニーとして業界を牽引。

設 立 1946年

所 在 地 ドイツ・ヴァルトキルヒ市

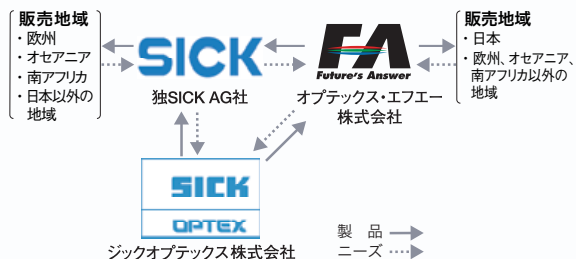
売 上 高 860億570万円

従業員数 4,095人

(2005年、1ユーロ=145円で換算)



## ● 当社とSICK AG社との関係



## 販売地域



- 上記は、ジックオプテックスにおいて開発している汎用機器及びアプリケーション機器の販売地域です。
- 当社で開発しているアプリケーション機器(CVSシリーズ)については全世界を販売地域としています。



## 2006.7 中部・東海地区の拠点として「名古屋営業所」を開設

当社は2006年7月、自動車業界における需要の発掘、市場開拓をさらに積極的に進めるために、国内でもとりわけ活発な市場である中部・東海地区を営業エリアとする名古屋営業所を開設しました。

中部・東海地区については、これまで本社で営業活動を行っていましたが、拠点開設に伴い営業活動の一層の効率化を図ることができ、商談回数も大幅に増加しています。今後、顧客企業に密着した提案型営業活動を展開し、市場拡大を図ってまいります。

### 名古屋営業所

〒465-0041 名古屋市長東区朝日が丘2番地 TSビル1階  
TEL:052-776-7300 FAX:052-776-7222



京都本社  
京都市山科区

東京営業所  
東京都新宿区

## 2006.2 「関西ノムラ資産管理フェア2006」に出展

当社は2006年2月17～18日、大阪ドームで開催された「関西ノムラ資産管理フェア2006」に出展しました。個人投資家向けとしては国内最大規模のイベントであり、約140社が出展し、来場者は延べ40,000人以上にのびりました。

当社ブースには、2日間で2,000人を超える個人投資家にお越しいただき、当社の事業内容を紹介するとともに、多数のご意見やご質問を頂戴しました。

今後も当社は、透明性が高く、迅速な情報開示を行うとともに、個人投資家の皆様に対する積極的なIR活動に取り組んでまいります。



## 2006.5 「第19回インターフェックスジャパン」に出展

2006年5月に東京ビッグサイトで開催された「第19回インターフェックスジャパン」に出展しました。この展示会は、医薬品、化粧品、洗剤の製造・開発に必要なあらゆる機器・システム・原料が一堂に集まるアジア最大の国際展示会であり、約1,100社の企業が出展し、延べ45,483名の来場者がありました。

当社ブースには、新製品のレーザ光電センサ「Z-L」シリーズ、ミニチュアセンサ「E」シリーズに加え、内蔵照明を緑色LEDから白色LEDにリニューアルした文字認識センサ「CVS4シリーズ」などを出展し、連日大勢のお客様にご覧いただきました。皆様からいただいた貴重なご意見、ご要望は、今後の製品開発に反映させていただきます。



## 2006.1 色判別センサ「CVS EASY」シリーズを発売

当社は2006年1月、オールインワン画像センサ「CVSシリーズ」の新シリーズとして、色判別を簡単操作で可能とした「CVS Easy1」を発売しました。分解能15,000色、色と面積の大小で判別できることから、ばたつくラインや広い視野が必要なアプリケーションに最適な製品であり、さまざまな業界での展開が期待できます。





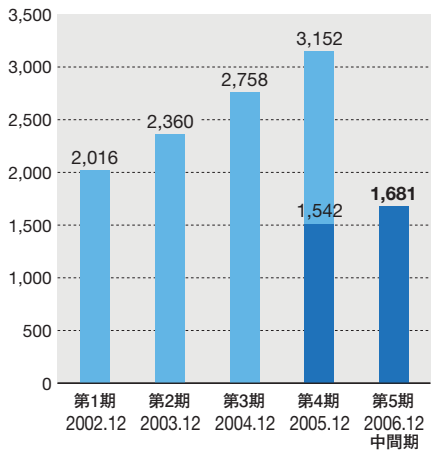
財務ハイライト

※ 当社は連結対象子会社がありません。

■ 中間期    ■ 通 期

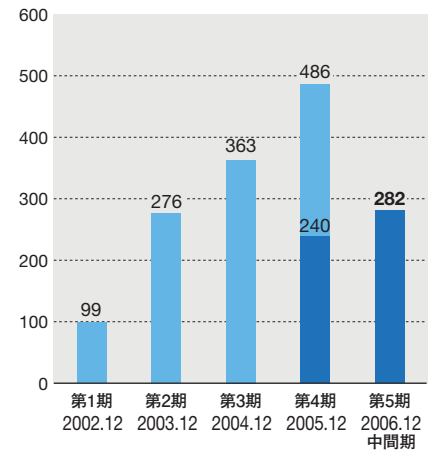
売上高

(単位:百万円)



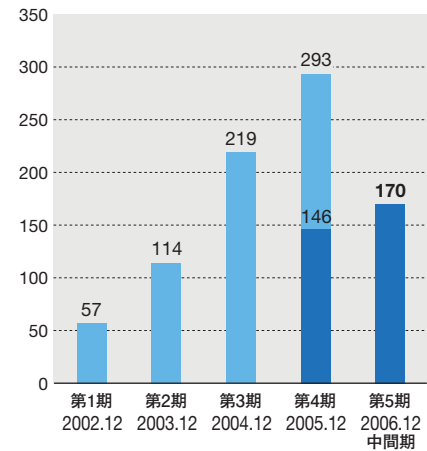
経常利益

(単位:百万円)



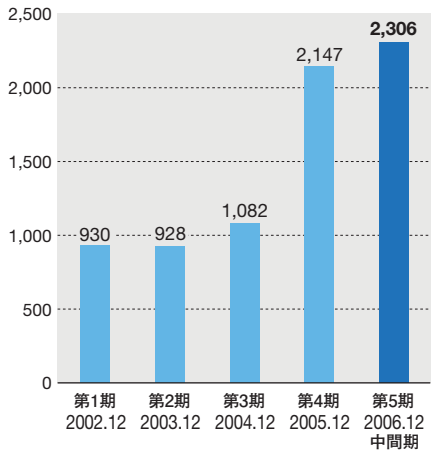
当期純利益

(単位:百万円)



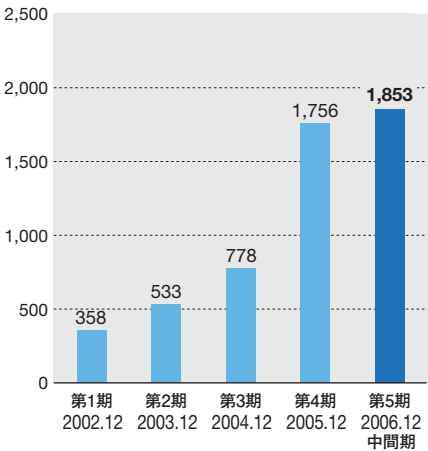
総資産

(単位:百万円)



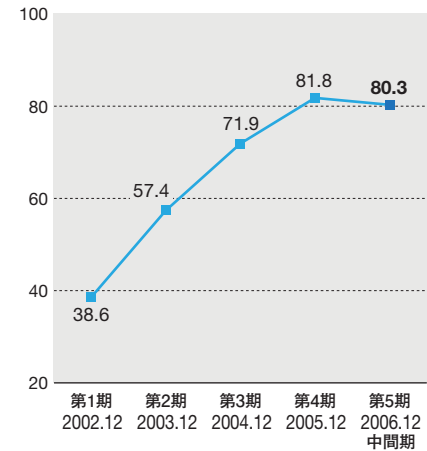
純資産

(単位:百万円)



株主資本比率

(単位:%)



配当について

当期末の配当金は、普通配当2,500円を予定しております。

※ 2005年12月期末配当金の内訳 普通配当 4,000円 上場記念配当 2,000円

※ 当社は2006年2月20日をもって、株式1株を2株に分割しております。

1株当たりの配当金(円)

	中間期末	期 末	年 間
2005年12月期	—	6,000	6,000
2006年12月期(予想)	—	2,500	2,500

要約個別中間財務諸表 ※当社は子会社がありませんので、連結財務諸表を作成していません。

中間貸借対照表(要約) (単位:千円)

科目	当中間期末	前中間期末	前期末
	2006年6月30日現在	2005年6月30日現在	2005年12月31日現在
(資産の部)			
1 流動資産	2,041,386	1,178,321	1,891,399
現金及び預金	1,202,397	483,461	1,053,621
受取手形	125,447	103,017	123,069
売掛金	467,650	375,438	446,195
たな卸資産	170,477	129,203	154,958
繰越税金資産	12,867	12,364	13,755
未収消費税等	36,711	37,553	75,933
その他	25,835	37,281	23,864
固定資産	265,587	252,777	255,723
有形固定資産	61,140	60,016	63,156
無形固定資産	10,964	8,911	7,771
投資その他の資産	193,482	183,849	184,795
資産合計	2,306,974	1,431,098	2,147,123

CHECK POINT

1 流動資産

売上増加にともなう売上債権、たな卸資産の増加により、前期末比107.9%と増加しました。

2 負債合計

仕入増加による仕入債務の増加等により前期末比116.1%と増加しました。

3 純資産合計

新株式の発行による増資及び利益の蓄積により、前期末比105.5%と増加しました。中間期末自己資本比率は80.3%となり、引き続き安定した財務内容となっております。

(単位:千円)

科目	当中間期末	前中間期末	前期末
	2006年6月30日現在	2005年6月30日現在	2005年12月31日現在
(負債の部)			
流動負債	394,863	456,004	338,355
買掛金	217,001	180,891	138,585
短期借入金	—	100,000	—
未払金	47,599	47,483	46,862
未払費用	9,226	11,674	11,083
未払法人税等	105,118	100,375	130,879
その他	15,917	15,578	10,944
固定負債	58,885	50,044	52,429
2 負債合計	453,749	506,049	390,784
(純資産の部)			
資本金	537,300	243,000	532,000
資本剰余金	544,873	144,073	539,573
利益剰余金	771,104	537,975	684,765
その他	△ 52	—	—
3 純資産合計	1,853,225	925,049	1,756,339
負債・純資産合計	2,306,974	1,431,098	2,147,123

4 売上高

5 営業利益

高付加価値製品の売上が前年同期に比べ1億円増加し、利益獲得に寄与しました。

6 現金及び現金同等物の中間期末(期末)残高

主に設備投資に16百万円、配当支払に72百万円を使用しましたが、営業活動により獲得した資金内となっております。

## 株式の状況

(2006年6月30日現在)

### 中間損益計算書(要約)

(単位:千円)

科目	当中間期 2006年1月1日から 2006年6月30日まで	前中間期 2005年1月1日から 2005年6月30日まで	前期 2005年1月1日から 2005年12月31日まで
<b>4 売上高</b>	<b>1,681,647</b>	<b>1,542,639</b>	<b>3,152,892</b>
売上原価	981,487	902,281	1,805,349
売上総利益	700,160	640,357	1,347,542
販売費及び一般管理費	417,962	400,319	846,270
<b>5 営業利益</b>	<b>282,198</b>	<b>240,037</b>	<b>501,272</b>
営業外収益	356	616	949
営業外費用	470	258	15,667
経常利益	282,083	240,395	486,554
特別利益	—	—	—
特別損失	209	—	746
税引前中間(当期)純利益	281,873	240,395	485,808
法人税、住民税及び事業税	102,084	98,226	197,023
法人税等調整額	9,550	△ 4,375	△ 4,549
中間(当期)純利益	170,239	146,544	293,334
前期繰越利益	—	1,430	1,430
中間(当期)未処分利益	—	147,975	294,765

### 中間キャッシュ・フロー計算書(要約)

(単位:千円)

科目	当中間期 2006年1月1日から 2006年6月30日まで	前中間期 2005年1月1日から 2005年6月30日まで	前期 2005年1月1日から 2005年12月31日まで
営業活動によるキャッシュ・フロー	229,735	182,524	183,371
投資活動によるキャッシュ・フロー	△ 19,559	△ 24,747	△ 39,934
財務活動によるキャッシュ・フロー	△ 61,400	100,000	684,500
現金及び現金同等物の増加額	148,775	257,776	827,936
現金及び現金同等物の期首残高	1,053,621	225,684	225,684
<b>6 現金及び現金同等物の中間期末(期末)残高</b>	<b>1,202,397</b>	<b>483,461</b>	<b>1,053,621</b>

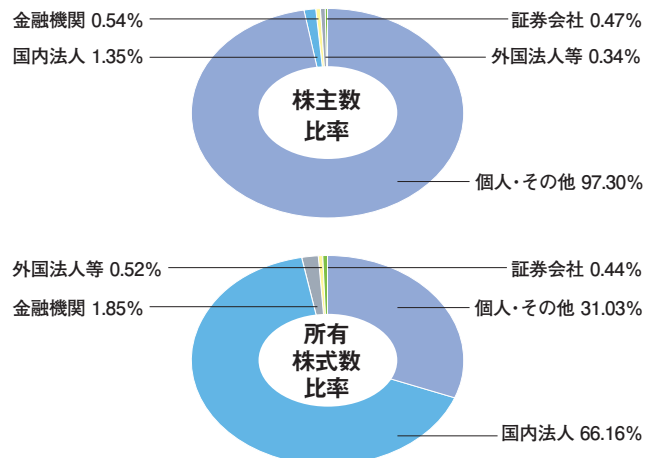
### 株主数および株式数

発行可能株式総数	80,000株
発行済み株式の総数	24,424株
1単元の株式の数	1株
株主数	1,478人

### 大株主一覧

株主名	株数	持株比率
オプテックス株式会社	15,400株	63.05%
小國 勇	728	2.98
小林 徹	280	1.14
オフロム株式会社	200	0.81
大阪証券金融株式会社	163	0.66
サンオクト株式会社	160	0.65
株式会社山正マーケティングサービス	160	0.65
大場機工株式会社	160	0.65
岩田 俊彦	160	0.65
西原 弘之	152	0.62

### 株式分布状況





## オプテックス・エフエー株式会社

〒607-8085

京都市山科区竹鼻堂ノ前町46-1 三井生命京都山科ビル6F

TEL : (075) 594-8139 FAX : (075) 594-8124

### ■ 会社概要 (2006年6月30日現在)

会 社 名	オプテックス・エフエー株式会社
本 社 所 在 地	〒607-8085 京都市山科区竹鼻堂ノ前町46-1 三井生命京都山科ビル6F
設 立	2002年1月7日
資 本 金	5億3,730万円
事 業 内 容	ファクトリー・オートメーション用光電センサ関連 機器、装置の製造・販売等
従 業 員 数	37名(出向者7名含む)
事 業 所	東京営業所 名古屋営業所(2006年7月3日開設)
関 係 会 社	オプテックス株式会社(滋賀) ジックオプテックス株式会社(京都)

### ■ 役員 (2006年6月30日現在)

代表取締役社長	小 國 勇
取 締 役	坂 口 誠 邦
取 締 役	岩 田 俊 彦
取 締 役	西 原 弘 之
取 締 役	小 林 徹
常 勤 監 査 役	見 座 宏
監 査 役	八 幡 知行
監 査 役	東 晃

#### 見通しに関する注意事項

当報告書の記載内容のうち、歴史的事実でないものは将来に関する見通し及び計画に基づいた将来予測です。これらの将来予測には、リスクや不確定な要素などの要因が含まれており、実際の成果や業績などは記載の見通しとは異なる場合がございます。

### ■ 株主メモ

上場証券取引所	大阪証券取引所ヘラクレス
証 券 コ ー ド	6661
決 算 期	12月31日
定時株主総会	3月に開催
基 準 日	12月31日
中間配当基準日	6月30日
株主名簿管理人	東京都港区芝三丁目33番1号 中央三井信託銀行株式会社
同事務取扱場所	大阪市中央区北浜二丁目2番21号 中央三井信託銀行株式会社 大阪支店
同 取 次 所	中央三井信託銀行株式会社 本店及び全国各支店 日本証券代行株式会社 本店及び全国各支店

#### ホームページのご案内



当社ホームページを2006年4月にリニューアルし、IR情報・製品情報などを充実いたしました。

IR情報ページでは、投資家の皆様に役立つ決算資料を掲載するとともに、当社の特長・強みを理解していただくためのコーナーも設けております。

ぜひ一度ご覧ください。

<http://www.optex-fa.jp/>



この報告書は古紙配合率100%再生紙、大豆油インキを使用しています。